OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	梅が香 : 古今集の梅花の歌に関して
Author(s)	宇佐美, 喜三八
Citation	語文. 1961, 24, p. 1-12
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68549
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

梅が香
——古今集の梅花の歌に関して——

宇佐美　喜三八

一

『箋注倭名類聚抄』巻第九の「梅」の項における注記の中には、「或曰、皇国古無レ梅、故古事記、日本書紀、皆無二是物一、後自二西土一致レ之、然則宇女是以二梅字音一爲レ名也、」と見え、賀茂真淵は「梅の詞」と題する文(1)において、「ふる事のふみに見えずして、万の言の葉のふみに載たる梅てふ木の花は、空みつ大和のくにのものならずして、ことさやぐからくにより、根こじ来れしを、飛ぶ鳥の明日香、荒妙の藤原の宮人ぞ、歌にもつらねはじめたる。」と述べてゐる。これら先賢の言葉のやうに、記紀には梅に関する記載が見あたらず、万葉に至って梅の詠まれた歌を数多く見ることができる。ウメといふ訓は「梅」の字の中国音が国語化したものであらうとは、現代の国語学者にも説かれてゐる所であって(2)、梅がかの地から渡来した木であることはすでに疑ふべくもないと考へる。

『万葉集』二十巻の中に梅を詠んだ歌は凡そ百十四首数へられ、植物を詠んだ歌では、萩の歌百三十七首に次いでその数が集中第二位になってゐる事実を見ると、新たに渡来した梅の木に対して、万葉時代の歌人たちがいかに多くの関心を寄せてゐたかが窺はれる。大陸から移植せられた木である以上、歌に詠まれた梅の木はいづれも栽培樹であったと看なされ、本来野生の梅はなかったに相違ない。さうして梅の木が植ゑられたのは花を観賞するためばかりでなく、その実を得て薬用に供する目的も存したのではなからうかと想はれる。小清水卓二氏は植物学者の立場から、万葉歌を通じて見られる栽培食用植物につき、「特にその原産地が他国のものでありながら、食用植物として重要な価値を認められて栽培せられてゐたと思はれる種類」(3)の中に梅をあげ、さらに「万葉植物中、薬用として効果ある植物名と、その用途一覧表」(4)の中で、梅の果実に止瀉・駆蟲・鎮嘔・鎮咳・解熱その他の用途のあることを示された。然し『万葉集』を見ても、梅の実を直接に詠んだ歌はこれを指摘することができない(5)。眞淵が『万葉集遠江歌考』(6)で「詩経といへるふみに梅を詠ぜしに、実の事をのみいひて、花やかをりをばいはざるなり。上古のことはまことあることどもにてしたはしきなり。」と述べてゐるのは、『詩経』召南の「摽有梅」を指したものであらう。「摽有梅」は実の落ちることを人事に関係させて詠んだ素朴な歌謡であるのに対し、『万葉集』の梅の歌は素朴であっても自然美を発見した文化人の感覚を通して花の美しさを詠んだものがその殆んどである。

梅がわが国に船載せられたのは果実を薬用に供する目的があったのかも知れないが、『万葉集』には梅の実が薬用に使はれた事実を知らせる歌はもとより、自然現象としての果実の生態を詠んだ歌もなく、梅の歌の多くは花の美を観賞して詠まれてゐる。

梅花の宴は万葉時代の人たちにとって、新しい風雅の遊びであった。その席で杯をあげて梅花の歌を詠ずることは、大陸の文人の風流に倣った知識人の文雅な催しであったに違ひない。『万葉集』巻五には、周知のごとく、天平二年正月十三日太宰の帥大伴旅人の官邸で梅花の宴が催されたことを述べて、そこに集った官人たちの梅花の歌を列ね記し、集中の一偉観となってゐる。宮中における梅花の宴はいつ頃から催されたものか詳かには知り難い。『続日本紀』巻十三の天平十年秋七月癸酉（七日）の条には、天皇が大蔵省に御して相撲を覧られ、その夕べ西池宮に御して殿前の梅樹を指し、右衛士の督下道朝臣眞備および諸ろの才子に勅して「人皆有レ志、所レ好下レ同、朕去春欲レ翫二此樹一、而未レ及二賞翫一、花葉遽落、意甚惜焉、宜下各賦二春意一詠中此梅樹上、」と仰せがあり、文人三十人が詔を承ってこれを賦したとの記事がある。秋七月のことで梅花の宴とは言ひ難いが、観梅の詩に関する最初の記録といふことができるであらう。『懐風藻』には侍宴応詔の詩に梅花を詠んだ作が幾首か見られ、これについては後に一言することにしたい。要するに、万葉時代には梅花の美の発見によって、その頃の文化人たちの間に新しい風雅生活の一様式が成立したのである。

万葉の歌人たちが賞美した梅の花は白い色のものであった。従って梅花を雪に譬へた歌や雪を梅花に見立てた歌も少くない。かの地の梅も「華白」(7)と説明せられてゐるやうに一般には白い花の咲く種類のもので、古い詩にも、例へば『玉台新詠集』巻四にある「落梅」の詩では、梅の初花が飛び散るさまを雪のしきりと降るさまに見立ててゐる。紅梅がわが国に入ったのは、恐らく平安時代になってからではないかと思はれる。『続日本後紀』巻十八の承和十五年正月壬午（廿一日）の条に「上御二仁寿殿一、内宴如レ常、殿前紅梅、便入二詩題一宴訖、賜レ祿有レ差、」と見えるのが、わが国で紅梅の記録の最初であるといはれてゐる(8)。

さてわたくしは、ここに『万葉集』の梅の歌について長々と縷説するつもりではない。万葉の梅花の歌に関して今一つの事実を述べ、それを契機として本論を進めることにしよう。すでに言ふまでもなく、万葉歌人の観賞した梅花の美は主として視覚に触れた美しさで、梅が香の美しさは全くといってよいほど顧みられてゐない。梅の香が詠まれてゐるのは集中次の一首のみである。

梅の花香をかぐはしみ遠けども心もしのに君をしぞ思ふ
（巻二〇・四五〇〇）

この歌は天平宝字二年二月式部大輔中臣清麻呂の宅に催された宴に際して主客の詠んだ十首の中の一首で、作者は治部大輔市原王である。主人に対して儀礼的な挨拶の意味を籠めた歌であって、第一・二句は清麻呂の徳の譬喩であるとの解釈が成立ち、一首全体が梅の香を主題とした歌になってゐないとしても、この歌において梅の香がかぐはしいものとして詠まれてゐることは明らかであらう。しかも注意すべきは、この歌が天平宝字二年に詠まれたといふ事実である。万葉の中で制作年代の明らかな歌では天平宝字三年正月一日の作が最も新しく、右の市原王の歌は万葉時代の終末に現はれた歌であるといひ得る。『古今集』の梅花の歌が万葉のそれとは異なり、

色よりも香を詠んだものが主となってゐるといふのは、今日においては常識的な問題であるが、この市原王の歌は『万葉集』の梅花の歌が『古今集』の梅花の歌に移る兆しを見せた過渡期の歌と見ることもできる。ここに至ってわたくしはこの歌を橋がかりとして、『古今集』に梅が香を詠んだ歌のあまた現はれる機縁になったと見なすべき、一つの問題を考へてみようと思ふのである。

二

『万葉集』巻五の旅人の邸宅における梅花の宴の歌には序があって、その序の終りには「詩紀二落梅之篇一。古今夫何異矣。宜レ賦二園梅一。聊成二短詠一。」と記されてゐる。「詩紀落梅之篇」の解釈に関しては諸説があり(9)、また序の文には修辞的な修飾があるにしても、結局それはかの地の文雅に倣って梅花の歌が詠まれた事情を示すものと解せられる。さうして古今調の成立に漢詩からの影響が認められる(10)ことを考へると、『古今集』において梅花の歌が香を詠むのを主にするに至ったのは、梅が舶来の木でもあり、唐土の詩からの影響ではないかといふ推測が一応は成立する。然しそれについて結論をいへば、古今風の物の見立て方に漢詩の影響があることは認め得るにせよ、梅の薫りを詠んだ歌の発生については、唐土の詩からの影響を取り立てて認めることができないと思はれる。宋の羅大経が『鶴林玉露』巻十六の「物産不レ常」と題した文の中で、梅の詩について次のごとく述べてゐるのは、その問題に関して有力な参考になるであらう。

書曰。若作二和羹一。爾惟塩梅。詩曰。摽有レ梅。其実七兮。又曰。終南何有。有レ条有レ梅。（中略）蓋但取二其実与一レ材而已。未二嘗及一レ其花一也。至二六朝詩一。乃略有二詠レ之一。及レ唐而吟詠滋多。至二宋朝一則詩与二歌詞一。連篇累牘。推為二群芳之首一。至レ恨下離騒集二衆香草一而不上応レ遺レ梅。（下略）

即ち『書経』説命（下）に見える辞句および『詩経』召南の「摽有梅」と秦風の「終南」との冒頭の二句を引いて、これらは梅の実と材とをのみ取り上げてその花に及んでゐないことを指摘し、六朝の詩から略ぼ花を詠じたものが見えて、唐詩にはそれが益々多くなり、宋朝に至ると、詩や歌詞に梅花の香を「群芳之首」と推して詠んだものが極めて夥しく現はれたと述べ、離騒に衆香草を詠みながら梅の香を無視したのは遺憾であると評してゐる。羅大経のこの言葉によれば、唐土において梅花の薫りが詩材として盛行するに至ったのは宋の時代になってからであって、わが古今集時代よりは後の時代のことに属する。従って『古今集』の梅の歌に花の香を詠む傾向が強く表はれるに至った現象につき、漢詩からの影響を一条件として想定するのは恐らく不当であらう。『五代詩話』に千古の絶調と評する「疎影横斜水清浅、暗香浮動月黄昏」といふ林和靖の「小園小梅」の詩は宋代になって作られたもので、『古今集』の歌人たちは知る由もなかったはずである。

古今風の歌が醸成されつつあった時代から後代に及んで、詩歌のみに限らずわが文学に多大の影響を与へた漢文学の書は、いふまでもなく『白氏文集』であった。われわれは羅大経の言葉を信ずべきであるが、『古今集』における梅の歌の特色を論ずる前に、なほ念のため『白氏文集』にある梅の詩を一応顧みておくことにしたい。『白氏文集』全七十一巻、家集としては厖大なものである。その中の三十四巻は文を輯めたもので、残る三十七巻におよそ二千八百二

首の詩が収められてゐる。然しその二千八百余首の詩の中で、一首全体が梅を題材にして詠まれてゐるものは、雨夜の星の如く寥々たる有様である。それらを挙げて見ると、先づ巻二十の律詩に「和下薛秀才尋二梅花一同飲見レ贈」と題した次の一首が見られる。

忽驚林下発寒梅　忽ち驚く林下の寒梅の発くを
便試花前飲冷盃　便ち花前に冷盃を飲むを試む
白馬走迎詩客去　白馬走りて詩客を迎へて去り
紅筵鋪待舞人来　紅筵鋪きて舞人の来たるを待つ
歌声怨処微微落　歌声怨むる処に微微と落ち
酒気醺時旋旋開　酒気醺ずる時に旋旋と開く
若到歳寒無雨雪　若し歳寒に到りて雨雪無くば
猶応酔得両三回　猶応に酔ひ両三回を得べし

この詩は観梅の宴を詠んでゐて、梅花の色や香には触れてゐる所がない。右の詩を賦した翌年また同じ処の梅花を尋ねて酒宴を催した。その時の詩は「与二諸客一携レ酒尋二去年梅花一有レ感」と題して同じく巻二十の律詩の中に見える。

馬上同携今日盃　馬上同じく携ふ今日の盃
湖辺共覓去春梅　湖辺共に覓む去年の梅
年年只是人空老　年年只だ是れ人空しく老ゆ
処処何曽花不開　処処何ぞ曽て花開かざらん
詩思又牽吟詠発　詩思又牽きて吟詠発し
酒酣閑喚管絃来　酒酣はにして閑に喚びて管絃来たる
樽前百事皆依旧　樽前の百事皆旧に依れり
点検惟無薛秀才　点検するに惟だ薛秀才無し

この詩もまた梅の色香を詠んでゐない。さらに後年、以上の梅花の宴を追懐して感慨を述べた詩が、巻五十三に「憶二杭州梅花一因叙二旧遊一寄二蕭協律一」と題して見える。

三年閑閊在余杭　三年閑閊余杭に在り
曽為梅花酔幾場　曽て梅花の為に酔ふこと幾場ぞ
伍相廟辺繁似雪　伍相の廟辺繁くして雪に似たり
孤山園裏麗如粧　孤山の園裏麗にして粧へるが如し
蹋随遊騎心長惜　蹋して遊騎に随ひ心長く惜しみ
折贈佳人手亦香　折りて佳人に贈り手亦香ばし
賞自初開直至落　賞するは初開より直ちに落つるに至り
歓因小飲便成狂　歓びは小飲に因りて便ち狂を成す
薛劉相次埋新隴　薛・劉相次ぎて新隴に埋まり
沈謝双飛出故郷　沈・謝双び飛びて故郷を出づ
歌伴酒徒零散尽　歌伴酒徒零散し尽き
唯残頭白老蕭郎　唯だ残る頭白の老蕭郎

この詩には「繁似雪」、「麗如粧」と梅花の美しさをいひ、「手亦香」の句も見えるが、全体として梅花の色香の美しさよりも人事的な感慨が重きをなしてゐる。これら三首の他に「寄レ情」と題して梅花を題材とした五言詩が、巻五十二の格詩雑体の中にある。

灼灼早春梅　灼灼たり早春の梅
東南枝最早　東南枝最も早し
持来翫未足　持し来りて翫ぶこと未だ足らず
花向手中老　花は手中に向ひて老ゆ
芳香銷掌握　芳香は掌握に銷し
悵望生懐抱　悵望は懐抱に生ず
豈無後開花　豈後の開く花無からんや

念此先開好　　此の先づ開きたる好きを念ふ

前の三首に比べると抒情的な気持が強く感じられ、「芳香」といふ語も見えてゐる。また巻五十四には「新栽レ梅」といふ題で、

池辺新種七株梅　池辺新たに種う七株の梅
欲到花時点検来　花時に到らんと欲して点検し来たる
莫怕長洲桃李妬　怕るること莫れ長洲桃李の妬むを
今年好為使君開　今年好し使君の為に開く

と詠んだ絶句がある。

『白氏文集』二千八百余首の詩の中で、一首全体が梅に関して詠まれてゐるものは、以上挙げた詩の他に見当らないやうである。一首全体が梅を詠んだ詩ではなく、句中に「梅」の語の見える詩は十余首あって、「春風先発苑中梅、桜杏桃梨次第開」（巻五・春風）の類であるが、それらの半ばは「早梅結二青実一、残桜落二紅珠一」（巻八・官舎）のごとく梅の実を詠んでゐて、特に梅花の色香を賞したものは見出すことができない。以上の記述によって明らかなやうに、『古今集』に『白氏文集』の詩句によって詠まれた歌は幾首もあるにせよ、『古今集』の梅が香の歌の成立には『白氏文集』の詩に拠った所が認められないのである。

なほ『千載佳句』について梅の詠まれた詩句を見ると、最初に、

梅含鶏舌兼紅気　梅は鶏舌を含みて紅気を兼ね
江弄瓊花帯碧文　江は瓊花を弄して碧文を帯ぶ
（巻上・四時部・早春・元稹）

がある。「鶏舌」は口気を治めるのに用ゐる香の名称で、梅に香のあることを「含鶏舌」といひ、「兼紅気」は紅梅であることを意味してゐる。この句は梅花の属性としての香に触れてはゐるが、全句を挙げて梅が香のみを賞美してゐるものではない。その他梅の詠まれた詩句は、二三の例をあげると、

園梅拆甲迎春咲　園梅は甲を拆き春を迎へて咲ひ
庭草抽心待節芳　庭草は草を抽き節を待ちて芳る
（巻上・四時部・早春・金立之）

不知近水花先発　知らず水に近き花の先づ発くを
疑是経冬雪未銷　疑ふらくは是れ冬を経て雪の未だ銷えざるか
と（巻下・草木部・梅・李端）

白片落梅浮澗水　白片の落梅は澗水に浮かび
黄梢新柳出城墻　黄梢の新柳は城墻より出づ
（巻下・草木部・梅柳・白居易）

といった風で、梅花の薫りを特別に賞愛した詩句は『千載佳句』にも見当らない。巻下・草木部の「梅」の項には右の李端の詩句の他に、前に記した『白氏文集』の詩から採った句二聯が入ってゐる。なほ『和漢朗詠集』春の「梅付紅梅」にある中国人の詩句は、すべて『千載佳句』に見えるものである(11)。『千載佳句』の成立時期は、『古今集』の成立から程遠からぬ延長年間であらうと看なされ(12)、『古今集』の梅が香の歌の発生が唐土の詩の影響によってゐないことは、『千載佳句』の詩句からも察することができる。

かうして『白氏文集』の詩や『千載佳句』の詩句を見ても右の通りで、やはり羅大経の説くやうに、唐土の詩で梅が香をもてはやすに至ったのは、古今集時代よりはかなり後の宋代に入ってからと見るべきである。

三

梅が香の歌の発生が唐土の詩の影響によるものでないとすれば、その出現の機縁はこれをわが国の文化的な事象に求めなければならないであらう。然しそれに先立ち、万葉時代から延喜の頃に至る邦人の梅を詠じた詩に、梅の香がどのやうに扱はれてゐるかを通覧しておかうと考へる。その期間の漢詩で後世に遺ったものは、『日本詩紀』に殆んど網羅せられてゐるが、今は伝存の詩集を中心に右の事実について一瞥を加へることにしよう。

最初に『懐風藻』を見ると、詩句に「梅」の語の見られる詩は十余首あって、梅の香に関する句の見える作はもとより僅少である。天智天皇時代の人、紀古麻呂の「望雪」の詩に梅の花を「梅芳」と称した熟語があり、この用例は中国の詩文にも見出し難いやうに思はれ、梅に芳香のあることを意識して用ゐた語であらう。大宝律令の撰定に関係した田辺史百枝の「春苑応レ詔」の詩の中には、

松風韻添詠　松風の韻詠を添へ
梅花薫帯身　梅花の薫身に帯ぶ
琴酒開芳苑　琴酒芳苑に開き
丹墨点英人　丹墨英人に点ず

とあって、梅花の薫りに及んでゐる。万葉に唯一首見える梅が香の歌よりは古い年代に成ったものである。次に百済和麻呂が長屋王の宅に宴して詠んだ詩の中には、

芳梅含雪散　芳梅雪を含みて散じ
嫩柳帯風斜　嫩柳風を帯びて斜なり

といふ句があり、「芳梅」は言ふまでもなく薫りのよい梅花を意味する。『懐風藻』の詩は時代的に『万葉集』の和歌と平行して詠まれてゐるが、そこには万葉歌よりも僅かながら梅が香に対して強い関心が表はれてゐるやうに思はれる。

平安時代に入って現はれた最初の勅撰詩集『凌雲集』には「梅」の字の見られる詩が数首あって、その中で梅が香の詠まれてゐるのは、多治比貞清の「奉レ和二御製春朝雨晴一」と題した詩の句の中に、

朝露懸余滴　朝露余滴を懸け
残虹巻半規　残虹半規を巻く
梅香深浅度　梅香深浅度り
柳色短長垂　柳色短長垂る

と見える一箇所だけである。「柳色」に対して「梅香」とあるのは、梅の特性として香の選ばれた点が注意せられる。

次の『文華秀麗集』では、梅に関して詠まれた句のある詩は三首見られる。先づ巻中の楽府にある嵯峨天皇の御製「梅花落」には次のやうな句がある。

歴乱飄鋪地　歴乱飄りて地に鋪き
俳徊揚満空　俳徊揚りて空に満つ
狂香燻枕席　狂香枕席を燻じ
散影度房櫳　散影房櫳を度る

風に翻り乱れ散る梅花を扱ひ、「狂香」といふ語でその芳烈な薫りが表はされてゐる。この御製の次に見える菅原清公の「奉レ和二梅花落一」と題した詩には、左のやうな句がある。

春風吹物暖　春風物を吹いて暖かに
朝夕蕩庭梅　朝夕庭梅を蕩かす
花点紅羅帳　花紅羅の帳に点じ
香縈玉鏡台　香玉鏡の台を縈る

梅花の散ることを主題として詠み、やはり花の香に関しても一句

を費してゐる。残る一首は巻下の雑詠に「夏日賦二雨裏梅一」と題して見える皇太子（後の淳和天皇）の令製で、これは梅が香ではなく梅の実を詠んだ詩である。

第三の勅撰詩集『経国集』は、現在では全二十巻のうちの六巻だけが伝はり、その中の一巻は文集である。残る五巻に「梅」の字のある詩は十八首あって、「梅」の字を含んだ題の詩が十一首を占めてゐる。巻十一の雑詠一の初めには梅を詠んだ詩が並んでゐて、それらの中にある平城天皇の御製三首には、いづれも梅を詠んで香に及んだ句が見られる。

詠二殿前梅花一

仲春雖少暖　仲春少しと雖も暖く
梅樹向驚時　梅樹向に時に驚く
発艶将桃乱　艶を発し桃と乱れ
伝芳与桂欺　芳を伝へ桂と欺く

落梅花

蕚尽陰初薄　蕚尽き陰初めて薄く
英疎馥稍微　英疎にして馥やや微なり
再陽猶未聴　再陽猶未だ聴かず
誰為悩芳菲　誰が為にか芳菲を悩しむ

詠二庭梅一

庭梅競艶色　庭梅艶色を競ひ
朝暮正芳菲　朝暮正に芳菲たり
可惜春風下　惜しむ可し春風の下
苑花一乱飛　苑花一たび乱れ飛ぶ

第一首目は前半四句、第二首目は後半四句を引いたもので、第三首目は全詩である。同じく巻十一にある嵯峨天皇の「閑庭早梅」と題する御製の前半四句を掲げると、

庭前独有早花梅　庭前独り早花の梅有り
上月風和満樹開　上月風和ぎ満樹開く

純素不嫌幽院寂　純素嫌はず幽院の寂たるを
濃香遍是犯窓来　濃香遍に是れ窓を犯し来たる

とあって、窓から流れ込む梅の濃香が詠まれてゐる。その他巻十にある小野岑守の「梅花引」には「水精窓外一株梅、擬下納二芬芳一圧中砌栽上」といふ句が見え、巻十一の高村田使が平城天皇の「殿前梅花」に和し奉った詩の初めには「忽見二春木、芳花一種催」、紀長江の紅梅を看る詩には「香雑二羅衣一猶可レ誤、光添二粧臉一遂応レ争」といふ句があって、いづれも梅を詠んで香に触れてゐる。

平安時代の初期の漢学者たちの家集は散逸したり残闕本となったりしたものが多く、それらから多数の詩を求めることはできないが、『古今集』撰進時代に及ぶ頃の菅原道真の詩は『菅家文草』および『菅家後草』にあまた見ることができる。道真は歌人としては有名な「こち吹かば」の歌も詠んだ人で、彼の詩に梅の香がどのやうに詠まれてゐるかは一応期待を抱かせるであらう。道真が梅を詠んだ詩は『文草』に十一首、『後草』に二首あって、そのうち香に触れたものは『文草』に七首見られる。『文草』巻一の初めにある「月夜見二梅花一」は道真の弱年時代の作である。

月耀如晴雪　月の耀きは晴れたる雪の如く
梅花似照星　梅の花は照れる星に似たり
可憐金鏡転　憐むべし金鏡の転じて
庭上玉房馨　庭上の玉房馨れることを

といふ五言詩で、梅の清香の薫る趣が詠まれた可憐な詩であるといふべきである。巻五にある「翫二梅花一」と題する七言絶句でも、梅が香の情趣を詠んでゐる。

随処有梅惣可憐　随処梅有り惣て憐む可し
不如独立月明前　如かず独立月明の前に
香風豈啻花吹出　香風豈に啻に花の吹き出すのみならんや
半是清涼殿裏煙　半ばは是れ清涼殿裏の煙

この詩では梅花の薫りと薫物の匂ひとの融合が詠まれてゐるが、巻一にある右丞相の邸で詠んだ「東風粧レ梅」といふ詩でも、梅の香を香剤の薫りに比してゐる。初めの四句を挙げると、

春風便遂問頭生　春風の便り遂に頭生を問ふ
為翫梅粧繞樹迎　為に梅粧を翫び樹を繞りて迎ふ
偸得誰家香剤麝　偸み得たり誰が家の香剤の麝
送将何処粉楼瓊　送り将る何の処の粉楼の瓊を

その他巻一の「春雪映二早梅一」には「鶏舌纔因二風力一散、鶴毛独向二夕陽一寒」（鶏舌は前出のごとく香を意味する）、同じく「書斎雨日独対二梅花一」には「紙障猶卑依レ樹立、蘆簾暫撥引レ香廻」、巻三の「早春侍二内宴一同賦二雨中花一」には「冒レ雨磬香不二奈何一」、「驚看麝剤添二春沢一」、巻六の「春先梅柳知」には「天孚二芳菲一為二第一一」など、梅花を詠んでその香を称へた句が見られる。道真は『古今集』成立時代の人で、彼が梅の香を詠ずるのは、当時の歌人が梅が香の歌を詠んだのと同じ好尚に因る所があると思はれる。

なほ『日本詩紀』巻三に採集せられた醍醐天皇の御製には「梅近香入レ簾」と題する一首があって、「和雨洗時香更烈」といった句も見られ、延喜時代の梅の詩らしい題によった御製である。

右によって知られるやうに、平安時代に入ると梅花の詩で香の芳しさを詠んだ句を持つ作品が屢ば現はれるに至ってゐる。当時のわが国の詩は六朝の詩や唐代の詩を模範として詠まれてゐたのであるが、『鶴林玉露』に説くやうに、六朝や唐代の詩では梅花を詠んでも一般にその芳香を賞美する傾向のないのを考へると、平安朝初期のわが国の詩に梅の香が屢ば顧みられてゐるのは、唐土の詩の模倣ではなく、生活における実感に基づいた美意識に因るものであらう。さうして漢詩に働きかけたその美意識は、『古今集』に梅が香の歌を現出させた美意識にもつながるものと考へられるのである。

四

『古今集』には梅の歌が春歌上に十七首、冬歌にも四首入ってゐる。冬歌に梅が入るのは春を待たずに咲く冬木の梅があるからで、すでに『万葉集』においても四季の分類のある巻八と巻十とにおいては、春の歌にも冬の歌にも梅の花を詠んだものが見られる。然し本来からいへば、梅花が春の花であることは言ふまでもない。さて『古今集』の梅の歌は春歌上では十七首の中の十三首まで梅の香が詠まれてゐて、冬歌の中にも一首香の詠まれた歌があるが、春歌上の香の詠まれた十三首のうち二首は色香を詠んだ歌で、香のみに関して詠まれた歌は十一首である。ここではその十一首を中心に論を進めようと考へる。

春歌上にある梅の歌十七首について、香のみ詠まれた歌を○印、色香を詠んだ歌を□印、その他の歌を×印で表はし、『国歌大観』の番号を付してその配列を示すと次の通りになる。

○○○○×□□○○○○○××××○○○
32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48

梅の香を詠んだ歌は梅の歌一聯の初めと終りと中央とに座ってゐて、三七と三八とは色香を詠んだ歌で、『古今集』春歌上の梅の歌において香を詠んだ歌が優位を占めてゐることは明らかである。先づ一聯の中央に位する四首（三九―四二）を挙げよう。

くらぶ山にてよめる　　貫之

梅の花にほふ春べはくらぶ山闇に越ゆれどしるくぞありける

月夜に梅の花を折りてと人のいひければ、折るとて詠める　　躬恒

月夜にはそれとも見えず梅の花香をたづねてぞ知るべかりける

春の夜梅の花をよめる

春の夜のやみはあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるる

初瀬に詣づるごとに宿りける人の家に、久しく宿らで程へてのちいたれりければ、かの家のあるじ、かく定かになむ宿りはあるといひいだして侍りければ、そこに立てりける梅の花を折りてよめる　　貫之

人はいさ心も知らずふるさとは花ぞむかしの香ににほひける

これらは延喜時代の巨匠たちの歌で、梅についてもっぱら香をとりあげてゐる。色よりも香を詠むことが当時の梅花の歌の新風であったのだらうと思はれる。最後の一首を除いて前の三首はいづれも夜の梅が香を詠んだ歌で、第一首と第三首とは詩の暗香浮動の趣を詠んだものと評せられてゐるが、「暗香浮動」の句は前述のやうに宋代の詩人の作に見えるもので、貫之や躬恒がその詩句に拠って詠んだといふ意味にはならない。これら前三首は知巧的な趣向を凝らした修辞によって、梅花の薫りを誇張して表現し、躬恒の「月夜にはそれとも見えず」の歌は、『古今集』秋歌下にある同じ作者の「心あてに折らばや折らむ」の歌と趣を一にする大袈裟な言ひ方である。延喜時代においては梅の香を詠むのはすでに新しい取材ではなく、梅の香の芳しさをいかなる趣向でいひ表はすべきかに着想や修辞の工夫が凝らされて、このやうに知巧性の勝った歌が現はれたものと見るべきであらう。最後の歌は人と梅花とを対照して、昔に変らず花が咲いてゐるといふ意味を「花ぞむかしの香ににほひける」と詠んだのが、新時代風の表現になってゐるものと考へられる。その時代の教養ある人たちは、梅といへば花の色とともに、必ずその香を思ひ浮かべたに相違ない。右の四首の前には梅の色香を詠んだ歌二首（三七・三八）が並んでゐる。

題しらず　　素性法師

よそにのみあはれとぞ見し梅の花あかぬ色香は折りてなりけり

梅の花を折りて人におくりける　　友則

君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る

窪田空穂氏は『古今和歌集評釈』において右の第一首を評した中で、―「色香」とはいってゐるが、身に近く見る事によって新たに発見されるものは「香」であらうから、香を主としての心と取れる。―と述べてをられる。第二首は人に梅の花を贈る時の挨拶として、相手の趣味をほめ讃へた歌である。当時の教養人は梅の花の色をも香をも味解し得べき人でなければならなかったのであらう。

梅の歌一聯の初めにある四首（三二―三五）は題知らず読人しらずの歌で比較的古い時代の作と思はれ、香を詠んではゐてもその趣

向は延喜時代の作よりも素朴であるといふことができる。

題しらず　　読人しらず

折りつれば袖こそにほへ梅の花ありとやここに鶯の鳴く

色よりも香こそあはれとおもほゆれ誰が袖ふれし宿の梅ぞも

宿近く梅の花植ゑじあぢきなく待つ人の香にあやまたれけり

梅の花立ちよるばかりありしより人のとがむる香にぞしみぬる

四首みな薫物の香の聯想から梅の香を誇張して詠んでゐる。第一首は梅の香に触れて袖が匂ふといひ、第二首は袖の香に触れて梅が匂ふといふやうに、それぞれ反対の因果関係で趣向を構へたものである。第三首は梅の香を待つ人の袖の香になぞらへ、第四首は梅の香が衣に染んで人のとがめる香となったといって、ともに「人」を恋人と解しても意味の通ずる人事を背景にした歌になってゐる。さうして四首いづれも梅の香は誇張せられてゐるものの、衣の薫物といふ当時の情趣生活の一内包の聯想から成ってゐる点において、前記の貫之や躬恒の梅の香の歌とは異なり、実際の生活に根ざした美意識が認められる。この事実は梅が香を詠んだ歌を考察するにあたって看過することのできない契機となるであらう。

梅の歌一聯の最後にある三首の香を詠んだ歌（四六―四八）も、衣を薫き染めるといふ現実の美的生活に立った詩的空想から生まれてゐる。

寛平の御時后の宮の歌合の歌　　よみ人しらず

梅が香を袖にうつしてとどめてば春は過ぐともかたみならまし

素性法師

散ると見てあるべきものを梅の花うたてにほひの袖にとまれる

題しらず　　よみ人しらず

散りぬとも香をだに残せ梅の花恋しき時の思ひいでにせむ

第一首と第二首とは、梅の香を薫物の香に見立てるといふ思想を根幹として趣向を立てた歌であることはいふまでもない。第三首目について景樹は『古今和歌集正義』に「残せは其枝に残せといふ也。さき〳〵の袖などにうつる類ひと思ふべからず。」と述べてゐて、字の表面に即して見ればその意味に違ひないが、この歌につき窪田空穂氏の『古今和歌集評釈』の評には、―香は衣の薫物の香を聯想させる物で、人事の上で人を思ひ出させるものとなってゐた。今は梅の香であるが、この心が関係してゐる。―とあって、この歌の香も薫物の香を聯想する心が関係するものであると述べられてゐる。まさにその通りであらう。『古今集』の夏歌（一三九）には、

さ月待つ花たちばなの香をかげば昔の人の袖の香ぞする

といふ歌があり、後の文学に屢ば引用せられて有名である。橘もまた『万葉集』では香が詠まれてをらず、『古今集』に至って衣の薫物の聯想から右のやうに歌はれたのであった。梅の香についても同様の聯想のあったことは考へられる。『源氏物語』早蕨の巻の、大君の亡き後、薫が宇治に中の君を訪ねて、庭先きの紅梅の花近く語り合ふ所に、

風のさと吹き入るるに、花の香もまらうどの御匂ひも、橘ならねど昔思ひ出でらるるつまなり。

とあるのは、後文から見て、亡き大君の袖の香を思ひ出す意味とは解し難いが、『徒然草』第十九段に、

花橘は名にこそおへれ、なほ梅の匂ひにぞ、いにしへの事も立ちかへり恋しう思ひいでらるる。

とあるのは、梅の香によって「昔の人の袖の香」を思ひ出す意味で

あらうか。

五

さて、ここで考へなければならないのは、梅が香の歌は衣の薫物の聯想によって発生したのではないかといふ問題である。既述の通り、『古今集』の梅の歌一聯の最初にある読人しらずの四首は比較的古い時代の作と認められ、それらはみな梅の香に因り薫物の香を聯想して趣向を構へた歌である。一聯の終りの方にある寛平御時后宮歌合の歌二首はそれよりも年代が新しいと思はれるが、やはり薫物の香の聯想によって成ってゐる。かうして薫物の聯想によって馴致せられた梅が香の歌は、薫物の聯想を表面から隠して「散りぬとも香をだに残せ」のやうな歌となり、遂には「闇に越ゆれどしるくぞありける」、「色こそ見えね香やはかくるる」のごとき延喜風の歌ともなったのであらう。

羅大経は前記『鶴林玉露』巻十六の文中で、『詩経』に梅の実や材のみを詠んで花に及んでゐないことを述べた後「或者古之梅花。其色香之奇。未レ必如二後世一。亦未レ可レ知也。」と論じてゐる。然し万葉時代の梅の花に香がなかったといふ訳ではなく、一首ではあるが、「梅の花香をかぐはしみ」といふ歌のあることは前に記した所である。鴻巣盛広氏は『万葉花譜』で、梅の馥郁たる薫りを詠んだ歌が一首しかないことを指摘して、「これは上代人が花の香に対して、比較的鈍感であった為とも言ひ得ないことはない。」（四九頁）と評してをられる。はたして万葉人は花の香に対して鈍感であったのだらうか。わたくしは『古今集』に至って梅の歌で香を詠んだものが多きを占めてゐるのは、梅花が進化したのでもなく、また万葉人が特に鈍感であったといふためでもなく、上述の通り、薫物の発達といふ文化現象に依存する所が大きいのではないかと考へる。

薫物の歴史に関してわたくしの知識は極めて乏しいのであるが、梅花の薫物は比較的早くから用ゐられたのであらうと思はれる。藤原定長すなはち寂蓮の著『薫集類抄』巻上には諸家の薫物の処方が記されてゐて、その最初に薫物の「梅花」について閑院左大臣以下十八家の処方を掲げてゐる。そのうち延喜の頃に至るまでの伝方の諸家の名のみを注記を附して挙げると、閑院左大臣（藤原冬嗣。贈太政大臣正一位）・賀陽宮（賀陽親王。二品治部卿。桓武帝皇子）・滋宰相（滋野貞主。参議宮内卿正四位下）・四条大納言（源定。正二位大納言左近大将。嵯峨帝皇子）。八条宮（本康親王。一品式部卿。仁明帝皇子）・小野宮（惟高親王。文徳帝皇子）・染殿宮（貞保親王。二品式部卿。清和帝皇子）・大和常生（延喜御時御蔵小舎人）らがある。薫物の「梅花」の注には「擬二梅花之香一也。春九可レ用レ之。」と記されて、閑院左大臣藤原冬嗣の伝方を例にあげると、

沈八両二分。占唐一分三朱。甲香三両二分。甘松一分。白檀二分三朱。丁子二両二分。麝香二分。薫陸一分。

と見えてゐる。他の人たちの処方もこれと大同小異で、滋宰相には三様の、四条大納言には二様の伝方が記されてゐて、古今風の歌が醸酵しつつあった時代には、諸家の「梅花」の薫物が相次いで趣向を争ってゐたのであった。

藤原冬嗣は淳和天皇の天長三年（八二六）七月に五十三歳で薨じた平安初頭の人であって、「梅花」の薫香は平安時代に入ってから次第に人々の間に愛用せられるに至ったのであらう。もとより薫物の「梅花」が造られたのは、天然の梅の花が有する芳香を愛賞する心から

出たものに相違ないが、薫物の「梅花」の香は天然の梅花の香よりも芳烈であったと思はれ、それによって人々の梅の花の香に対する関心は高められたことが考へられる。さうして梅の花を歌に詠まうとする人たちはおのづから新しい美の領域を取り上げずにはをられなかったであらう。「折りつれば袖こそにほへ」、「誰が袖ふれし宿の梅ぞも」といひ、「待つ人の香にあやまたれけり」、「人のとがむる香にぞしみぬる」といふ梅の香を誇張した詠嘆は、薫物の「梅花」の香を体認した人たちの情感に基づく趣向として理解することができる。

わが国の漢詩で梅が香の詠まれたのも唐土の詩の影響ではなく、やはり薫物の「梅花」と関係があらうと思はれる。前に挙げた『経国集』の紀長江の紅梅を看る詩に「香は羅衣に雑はり猶誤る可く」といふのは衣の薫物の聯想であり、『菅家文草』巻五の「香風豈に啻に花の吹き出すのみならんや、半ばは是れ清涼殿裏の煙」とあるのは、空薫きの香などを詠んだのであらうと解せられ、いづれも現実に薫物の「梅花」の調合せられてゐた時代の作である。また道真の詩に梅の香を形容して「香剤の麝」、「麝剤」などの語が見られるのは、「麝」を一般的に香料を指した語と見て、必ずしも正直に麝香と解する必要はないかも知れないが、薫物の「梅花」からの聯想が考へられる。『薫集類抄』の伝へる十八家の「梅花」の処方には、いづれもみな麝香が入ってゐるのである。

以上の如く、平安時代に入って梅の歌で香を詠んだものが目立って来たのは、彼の地の詩からの影響ではない。薫物を愛する生活感覚から自然に梅が香への関心が強まり、『古今集』では梅が香の歌が主となるに至ったのであらうと思はれる。この小稿はその消息を幾分なりとも明らかにしようと意図したものである。

注1『賀茂翁家集』巻四。(『梅合』の文を訂正したもの)。
2例へば吉沢義則著『国語史』六五頁・小林好日著『国語学通論』二二七頁・岩淵悦太郎著『国語概説』一〇三頁など。
3『万葉植物と古代人の科学性』三六頁。
4同右、五四頁。
5巻三・三九九番および巻八・一四四五番は梅の実を詠んだ歌として挙げられるが、直接に梅の実を詠んでゐない。
6巻二〇・四三二四番の「等倍多保美」の歌の注。
7『詩経集伝』召南の「摽有梅」の注参照。
8鴻巣盛広著『万葉花譜』五二頁参照。
9小島憲之「懐風藻より天平万葉の詩序へ」(国語国文昭和三三年一〇月)・「落梅之篇」(国語と国文学昭和三四年六月)・倉野憲司「万葉集巻五梅花歌序の詩紀落梅之篇について」(同、昭和三四年二月)・古沢未知男「万葉『詩紀落梅之篇』続貂」(同、昭和三六年五月)。
10小沢正夫「古今調の歴史的考察」(国語と国文学昭和三六年五月)参照。
11流布本『和漢朗詠集』の「梅」に菅三品の詩句とあるのは、『千載佳句』春の「早春」にもある戴叔倫の句である。
12金子彦次郎著『平安時代文学と白氏文集』(句題和歌・千載佳句研究篇)第三の第四章第六節参照。